

手打ち、半殺し

挿絵:入澤良枝

昔、昔のこと。若いお坊さんが、全国
托鉢の旅をしていた。

お坊さんは歩き疲れて、どこかへ泊め
てもらおうことにした。ようやく山の中で
灯りのついている一軒の家を見つけ、
玄関先で今晚一晩泊めてもらえないか
とお願いをしたところ、中から、人の好
さそうな夫婦が出てきた。

「これはこれは、お坊様。さぞかしお疲
れでしょう。狭い家ですが、どうぞお
上がりください」

と快く迎え入れてくれた。

二人はとても親切で、贅沢とは言えないにしても、心のこもった夕食とお風呂を
いただき、さっそく休ませてもらうことにした。



さてさて、お坊さんが布団に入りう
つらうつらと眠りかけたときのことじ
ゃ。隣の部屋から夫婦のひそひそ話が
聞こえてきた。

「今晚の客は、旅の坊さんじゃな。も
う眠ったかな？」

「もう眠ったですよ」

「さて明日の朝のことじゃが、どうし
ごうしよう※1 かいの？手打ちでええ



※1「しごうする」=「やっつける」の広島弁

かのう」

「手打ちでええですよ」

「そうか、それで半殺しにするか、本殺しにするかじゃが」

「そうですねえ、まだ若いから半殺しでもええんじゃないですかね」

「そうだな、ではそうしよう。明日の朝は、手打ち、半殺しじゃ」



お坊さんは、その話を聞いて背筋がぞっとした。体がぶるぶると震えだした。

あの夫婦は親切そうに見えたが、とんでもない悪人じゃった。あれは人ではない。きっと鬼じゃ。わしはとんでもない家に泊まってしもうた。明日の朝、わしは手打ち半殺しにされるんじゃ。くわばら、くわばら。こんなところに一時もおらりゃあせん。よし、二人が寝静まったらすぐに逃げ出そう。

お坊さんは、しばらくじっと息をひそめていた。やがて夫婦が眠ったと思われる頃、お坊さんは、そっと寝床を抜け出して音を立てないように旅支度を整えると、抜き足、差し足で玄関まで行き、草鞋を履いた。そうやって闇の中、音を立てないように静かに戸を開けようとしたが、建付けが悪いらしくなかなか戸が開かない。そのうちにゴトンと大きな音を出してしまった。しまった、気づかれたか？早く逃げ出さなければと、戸を開けようと力を入れたが、焦れば焦るほど、ゴトゴトゴトンと大きな音が鳴るばかりで戸はなかなか開いてくれない。

気配を感じはっとして後ろを振り向くと、夫婦が起きてきてお坊さんをじっと見下ろして立っている。

「ああ、見つかってしもうた。わしは殺される」

夫婦は、

「お坊さん、いったいどうされたんじゃ？こんな夜更けにいったいどこへ行こうとしているんじゃ？」

お坊さんは、ぶるぶるぶるぶると震えながら言った。

「あ、あんたたちは、このわしをいったいどうしようと言うんじゃ」



夫婦は、不思議そうに顔を見合わせている。

「私らは、お坊さんに泊まってもらうと、仏様のご加護があるような気がして心より喜んでいたのじゃが。何か失礼なことでもしましたかの？」

「嘘をつくな、わしは聞いたんじや。あんたらの話しているのを全部この耳でしっかりと聞いたんじや」

「えっ？いったい何のことですかの？どんな話を聞いたといわれるんです？」

「しらばっくれるな。さっき、明日の朝、わしを手打ちにすると言うもったぞ。

それから半殺しにするとも言いよったじゃないか」

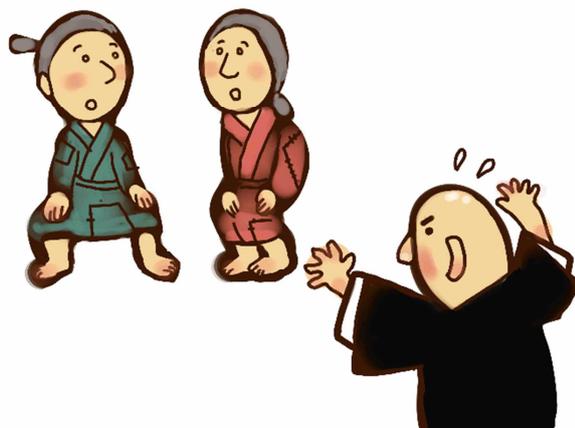
それを聞くと、ハッハッハッ…と、二人は急に大声で笑い始めた。しばらく腹を抱えるほど笑った後で、

「お坊さん、それはとんだ勘違いというものじゃ。明日の朝、お坊様をどうやってご馳走しようかと二人で明日の朝の仕事の段取りをしようたんじや。手打ちというのは、こころあたりの名物、蕎麦のことじゃ。『手打ち蕎麦にしようか』と言うもったんじや」

「なっ、何？そっ、蕎麦じゃと。手打ち蕎麦じゃと。そっ、それなら半殺しというのは、何じゃ、本殺しというのはなんじゃ。確かにそう言うもった。わしが若いから半殺しでもええんじゃないかと言ったのをこの耳で聞いたぞ」

「違いますよ。半殺しというのは、おはぎのことですよ。おはぎというのは、小豆をまがして食べるんじやが、完全に潰して食べたら、

小豆の風味が無くなるけえ、半分潰して半部は豆の形が残るように潰すんです。それをこの地方では、半殺しというんですよ。でも、お年寄りには、本殺しというて、小豆を全部潰した方が消化にいいからそうするんですよ。お坊さんはまだ若いから『半殺しでもええんじゃないかねえ』とそう言うもったんですよ。」



「えっ、そっ、そういうことだったんか？わしは半殺しの目にあうんかと、もう怖くて、怖くて、一刻も早う逃げにゃあいけんと思うてのう」
と言うと、お坊さんは急に腰が抜けてへなへなへなとその場へ、へたりこんでしまいましたとさ。

